

「厳しいことを言ってくれる人を、大切にしてください」

ケアプランの価値 IV

馬渡 徳子

「厳しいことを言ってくれる人を、大切にしてください」

この言葉を遺して下さった 31 年のお付き合いの患者さんを、先日お看取りさせて戴いた。

実母と夫と本人の三人のケアマネジャーを担当させて戴いたことから、住宅改修も三回しており、コンセントの位置まで記憶している。

実母と夫を看取られた後、私にこんなことを言われた。「私が死んだら、お花は要らない。おそらく、友人たちが沢山持ってきてくれるから。あなたには、夫と私の大好きの一口珈琲羊羹

をお供えして欲しい。約束してね。」

患者さんとは、子どもから高齢者までの障がいのある人に列車での旅行を実現する「石川県にひまわり号を走らせる会」で、出逢った。私は、ソーシャルワーカーとして、医師や看護師、リハビリ職と医療班として、付き添っていた。当初は、県内、そのうちに北信越になり、列車は飛行機となり、ディズニーランドや沖縄、北海道、ハワイにも行った。

患者さんは、地域と職域での顔の広さを活かして、毎年沢山の支援金とボランティアを集め、新聞に投稿して、この活動への支援層を拡げていかれ

ることに尽力された。

納得のいかないことには、毅然として立ち向かい、患者仲間の行政不服審査請求の代理人の一人として、何件も闘い、「認容」を勝ち取っておられる。

当時の私の勤務先の病院で、今後更に、採算の合わなくなることが見込まれる「プールリハビリ」をどう存続するかで、病院管理部と患者会＋患者会担当職員が激しく対立した時期があった。全国的にも、プールリハビリは珍しく、県内の病院には2つしかなかった。学会でも医師を始めとする多職種が、その効果を様々な観点から実績報告をしてきたことから、何とか工夫して残せる方法はないかと、患者会役員と患者会担当職員で、県内外のリサーチを行い、結果として「短時間の通所リハビリでのプールリハビリ」という形をとり、介護保険制度事業とし、存続することに決まった。

経営者である病院管理部に向けて、患者さんが言われた言葉が、「皆さんの様に、トップに立つ方だからこそ、どうかこれからも、『厳しいことを言ってくれる人を、大切にしてください』それは、私たち患者さんです。」だった。

こんな言葉を言って下さる患者さんに出逢えたこと、そして、病院経営において、民主的な組織運営体制を継続してきた組織を、心より誇りに思う。

患者さんのケアプランには、サービス計画書には、ご要望通りに「みんなの財産であるプールリハビリに、90歳まで通い続けることができるように体調を整えたい。」と記載した。

あと、5年届かなかったが、きっと天国で、先に逝かれた患者会の方々と賑やかに談笑しながら、プールリハビリをしておられると思う。

合掌